伊豆利彦 著

日本近代文学研究

新日本出版社

伊豆利彦（いず　としひこ）
1926年生れ
1950年　東京大学文学部国文学科卒業
現　在　横浜市立大学教授

日本近代文学研究

1979年2月25日　初　版　　定　価　3500円

著　者　伊　豆　利　彦
発行者　松　宮　龍　起

郵便番号151　東京都渋谷区千駄ヶ谷3—11—8
発行所　株式会社　新　日　本　出　版　社
電話 東京（478）3311
振替番号 東京3-13681
印刷　亨有堂印刷　　製本　古賀製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

伊豆利彦 著

日本近代文学研究

新日本出版社

日本近代文学研究

目　次

I

日本近代文学史とプロレタリア文学——漱石と啄木を手がかりに——……7
夏目漱石と「明治の精神」……51
国木田独歩におけるヒューマニズムと文学……87
ひとつの道標——島崎藤村「農夫」——……102
『夜明け前』の世界……116
石川啄木と日本の近代文学……167
『或る女』……174
芥川文学の原点——初期文章の世界——……179
芥川龍之介——作家としての出発の一考察——……197

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅱ

小林多喜二と近代文学……219
若き多喜二の彷徨と発見……237
『一九二八年三月十五日』……290
『東倶知安行』……308
『蟹工船』……321
『党生活者』の問題……335
あとがき……377

日本近代文学史とプロレタリア文学

——漱石と啄木を手がかりに——

1

『それから』の主人公、長井代助はブルジョアの次男で、大学卒業後四年、すでに三十歳にもなるのに、職業も持たず、結婚もせず、またなにか芸術上の仕事なり何なりをするということもなく、ただぶらぶらと唯美的、享楽的、趣味的な生活をしている。なぜ漱石はこのような小説を書いたのか。

漱石は江戸の没落した旧名主の家に生まれた。学生時代、親から離れて生活し、アルバイトして学資を得たことがあるというが、それほど経済的に困窮していたわけではない。しかし先祖伝来の資産はうしなわれたし、その末男だったのだから、はやく自立して、自分の力で金をかせがなければならないという立場にあった。学生時代に一時家を出て自立生活をしたということは、その自覚が人一倍強かったことを示すものである。人間として親から自立し、独立の人格として自己を保持するためには、経済的に親から自立しなければならぬという考えがそこにはっきりあらわれていると思われる。漱石は日本の近代作家の中でもっとも深刻に金銭と人間的自由の問題に取り組んだ作家である。

『道草』には生まれるとすぐ里子にやられ、養子にやられ、また実家にかえされた漱石自身の生いたちが作品化されて回想されている。健三が養家から実家にもどって来たとき、それまで養父母の手前、始終にこにこしていた

実家の父の態度が急に変る。健三は父が厄介物を背負いこんでから、すぐ「慳貪」に調子を改めたことに、「一度は驚いた。次には愛想をつかした」のである。

「実父から見ても養父から見ても、彼は人間ではなかつた。寧物品であつた」（九十一）と漱石は書いている。ただ実父ががらくたとして彼を取り扱ったのに対して、養父は今に何かの役に立ててやろうという目算があるのがちがうだけであった。健三は「もう此方へ引き取つて、給仕でも何でもさせるから左右思ふが可い」と養父にいわれて、驚いて逃げ帰ったことがある。「酷薄といふ感じが子供心に淡い恐ろしさを与へた。其時の彼は幾歳だつたか能く覚えてゐないけれども、何でも長い間の修業をして立派な人間になつて世間に出なければならないといふ慾が、もう充分萌してゐる頃であつた」と漱石は書いている。

『道草』の世界は、はじめから終りまで金の問題がまつわりついている。父、養父母、妻、妻の父、姉、姉の夫、それらの人々との関係をこわばらせ、自然な人間的感情を凍らせるのは金である。そしてまた金の力は人々の関係をやわらげもする。人々は金に支配され、金におしつぶされて暮している。

彼はけち臭い自分の生活状態を馬鹿らしく感じた。自分より貧乏な親類の、自分より切り詰めた暮らし向きに悩んでゐるのを気の毒に思つた。極めて低級な欲望で、朝から晩まで齷齪してゐるやうな島田をさへ憐れに眺めた。

「みんな金が欲しいのだ。さうして金より外には何にも欲しくないのだ」

斯う考へて見ると、自分が今迄何をして来たのか解らなくなつた。（五十七）

『道草』は大正四年（一九一五）、死の前年の作品である。漱石は長い病気がちの生活に苦しんでいた。そしてしばしば自分の生涯をふりかえらなければならなかった。自分は何のために生きてきたのか。自分の一生はついに何であったのか。そして人間とはいったい何なのであるか。「御前は必竟何をしに世の中に生まれて来たのだ」（九

十六)という問をどこからか投げかけてくるものがあるのを健三は感ずる。そのような場所で書かれたこの作品が、人間における金の問題を息づまるような執拗さで追求しているのである。

私たちは資本主義社会は金が人間を支配する世界であることを知っている。その支配をたちきって、人間が人間として生きる道を見出すことこそ、私たちの課題であると思うが、漱石ほど真正面から金の問題に取り組んだ作家はないとすれば、そこに漱石が近代を代表する作家であり、現在の私たちにも強い感銘をあたえ続けている理由のひとつを見ることが出来ると思う。漱石は金のために金を追求したのではない。人間を追求して金につきあたったのであり、金の問題を追求することによって人間の問題をあきらかにしたのである。このような意味で、まず漱石をとりあげて、日本の近代文学史とプロレタリア文学の問題を考えて見ようと思う。

2

『それから』の代助は明治の資本家である父、長井得との関係で描かれている。また明治の被雇傭者知識人である平岡との関係で描かれている。そしてまた、文筆で暮しを立てている寺尾のような人物も出て来る。自由業ともいうべきものだが、しかし自由業である文筆業も、金＝資本に支配されているという点では被雇傭者知識人と大して変りはない。その自由は見せかけだけのものである。漱石は代助をこのような人々の間に置いて描いた。金を中心に動く資本主義社会にあって、はたして人間は金から自由であり得るか。金の支配を脱して、人間が人間として生きることは可能であるかを追求した。

代助の父は十七、八のころ維新の動乱にあい、その後、明治政府の官僚になり、実業家となった。今では相当の財産をもち、有島武郎の父などと同様な、明治の官僚資本家のひとつの典型である。「誠者天之道也」という掛軸を、いつも床の間に掛けている。先代の旧藩主に書いてもらったのだという。熱意と誠実があればどんなことでも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

出来ないことはないというのがその主張であった。十八の昔から、ただひと筋に世のため、国のために尽力して来たという。その結果として今の地位と財産を得たのだと信じていた。そして代助にも社会のため国家のために、なにか役立つ仕事をしろと口ぐせのようにいう。旧時代に育ち、道義本位の教育を受け、その思想をそのまま持って今日に生きているのが代助の父である。しかもはげしい生存競争の現代を勝利者として生き、実業家として今日の地位を築いた。道義本位の思想と、資本家としての生活の間には、深刻な矛盾があるはずなのに、それをすこしも意識していない。

父から見ると代助は、高等教育を受けていながら、なにもせずにぶらぶらしている理解できない人間だった。しかし代助から見ると、父は「自己を隠蔽する偽君子」か、「分別の足らない愚物」か、そのどちらかでなければならないような気がするのだった。漱石は、代助にとって「左ういふ気がするのが厭でならなかつた」(九)と書いている。そこには父と子の断絶がある。代助の受けた新しい教育、知識、理知は、父に対する情合をからさずにいなかった。代助はそこに明治の近代の不幸を感じている。

代助の父のような考え方は明治社会に一般的なものであった。それはまた、道徳教育の名において、今日におしつけられようとしているものでもある。漱石はこのような道徳思想と鋭く対立した。代助は父を論語だの王陽明だのという金の延べ金をのんでいると評する。それは延べ金のまま出て来るというのである。道徳思想が生活の事実と浸透しあわず、生活によって消化されずに、思想が思想として、言葉が言葉として生活の事実とは別に信奉され続ける。そのために自分の生活の事実を事実として見ることをせず、自己をそれらの思想でかざり、美化する。そればかりか、それを他に強制することで、生活の事実を事実として見つめる所に生まれる思想や、それにもとづく生き方をおさえつけようとする。漱石はこのような思想の虚偽性を、代助の父を描くことであばき出した。

代助は「御父さんの国家社会の為に尽すには驚いた。何でも十八の年から今日迄のべつに尽してるんだつてね」

「国家社会の為に尽して、金が御父さん位儲かるなら、僕も尽しても好い」(三)という。それは父の矛盾をつくことによって、美名で自己の醜悪をかくし、国家・社会のため、道義のためと称して、国民の自由と権利を奪い、自己の利益に奉仕させようとする明治の社会を支配するものたちの虚偽をつくものであった。

漱石は当時世間をさわがせた代議士に対する贈収賄汚職事件である日糖事件を作中に組みこみ、それが発生すると急にあわただしく奔走しはじめる父や兄の姿を描いている。これに関連して、そのすこし前におこった東洋汽船の事件、日清戦争当時の大倉組の事件にも言及している。平岡もまた銀行の汚職事件に関係して職をうしなったのであった。漱石は当時の政界・財界のみにくい結びつき、その腐敗に鋭い眼を注いでいる。それは単に社会の表面にあらわれ、新聞をにぎわせている事件だけのことではない。それらはただ単に偶然のことから表面に出たものにすぎない。日糖事件の場合も、英国大使が日糖株を買いこんで損をして、苦情を鳴らし出したので、日本政府も英国に対する申しわけに手を下したのだという。多くの事件は表面にあらわれずに隠蔽されている。表面に出るのが珍しいので、むしろそれは政界・財界のどこにもある一般的なことなのだ。代助は、もしやかましい吟味をされたら、父や兄も拘引される資格ができはしまいかと疑っていた。しかもこのような醜悪なことをする人たちほど、口を開けば国家・社会のためといい、道義を説いてやまないのである。代助の父はそれを代表するものであった。漱石はこのように明治の社会の虚偽性を、その腐敗・堕落とともに鋭くえぐった。

代助の父は表面は昔の恩義を口にしながら、実際は地方の資産家で、自分の利益になる人の娘と代助を、政略的に結婚させようとする。そして代助がこの結婚をことわったとき、もうお前の世話はしないといいわたす。結婚の問題は金の問題に結びついていた。この社会では、夫婦の関係も、親子の関係も、すべてが金の問題に結びついている。代助が父のすすめる話をことわったのは、今は友人平岡の妻になっている三千代に対する愛を自覚したからであった。それを公言し、三千代と結婚しようとしたとき、代助は父との関係を断たれたばかりでなく、道徳上の

罪人として、社会から葬られなければならなかった。そして姦通罪という刑法上の罪にも問われるかも知れない所に追いこまれた。

日頃代助は父に誠実と熱心が欠けていると非難されていた。しかし代助が自分の心の底に秘められた愛に目ざめ、誠実と熱心をもってそれを貫こうとするとき、生活の基盤をうしない、社会的に葬り去られる危険な場所に立たされた。食うために働くことを侮蔑していた代助は、今はどうしても食うために働かなければならない。そしてそうなって見れば、代助は平岡よりも、寺尾よりも、もっと無力な、みじめな存在だった。代助の優越性はすべてくずれおち、かれは赤裸のまま社会に投げ出される。漱石はそのような代助の絶対絶命の場所にわが身を置き、自分の生きる明治の社会と真正面から向きあって、『それから』の世界を創造していった。

漱石は『それから』を書き、その世界を生きることによって、自分自身に真正面から向きあい、真実に自分自身を生きようとした。そして自分自身に真正面から向きあい、真実に自分自身を生きるということは、真正面から自分の生きる社会の現実と向きあうことであった。漱石は「彼の周囲を人間のあらん限り包む社会」と書き、「父の後には兄がゐた、嫂がゐた。是等と戦つた後には平岡がゐた。是等を切り抜けても大きな社会があつた。個人の自由と情実を毫も斟酌して呉れない器械の様な社会があつた。代助には此社会が今全然暗黒に見えた。代助は凡てと戦ふ覚悟をした」(十五)と書いている。

代助は自分を特殊人だと思っていた。代助はすべてに対する批評家であった。父と父によって代表される財界・政界の人々の虚偽を軽蔑すると同時に、食うために自分自身を見うしなって、ただあくせくと働かなければならない金をもたぬ知識人の、余裕のないみじめさをあわれんだ。しかしその代助はいったい何者であったのか。冒頭に、寝ていて右手を心臓の上にあて、じっと鼓動を検している代助が出てくる。「彼は胸に手を当てた儘、この鼓動の下に温かい紅の血潮の緩く流れる様を想像して見た。これが命であると考へた。自分は今流れる命を掌で抑

へてゐるんだと考へた」（一）と漱石は書いている。ここには代助の生存の根本的なありようがあらわされている。かれの生存は自己にはじまって自己に終る。かれはただその自己をひたすら愛し、あじわおうとしている。

ていねいに歯を磨き、熱心に肌の手入れをする代助を漱石は書いている。「代助は其ふつくらした頬を、両手で両三度撫でながら、鏡の前にわが顔を映してゐた。丸で女が御白粉を付ける時の手付と一般であつた。実際彼は必要があれば、御白粉さへ付けかねぬ程に、肉体に誇りを置く人である。」代助は人からおしゃれといわれても何の苦痛も感じない。それは実業をすべての上におき、美や芸術を蔑視する功利的な明治社会に対する批判であった。「それ程彼は旧時代の日本を乗り超えてゐる」（同）と漱石は書いている。

かれは美の世界に生きようとして、処世上の経験を侮蔑する。「麺麭に関係した経験は切実かも知れないが、要するに劣等だよ。麺麭を離れ水を離れた贅沢な経験をしなくつちや人間の甲斐はない」（二）という。かれは音楽や美術の鑑賞家である。その美的経験をなによりも重大視している。それは生活にうちひしがれた明治の知識人の悲惨な姿をひたすら描き、これが人生だと主張し、それ以外の美も芸術もいっさい認めない、当時支配的だった自然主義に対する批判であった。代助はその思想の近代性において、その贅沢な美的生活において、明治の社会における優越者であった。

代助は旧時代の思想や習慣から自由であり、金銭の束縛から自由であった。かれは自由に自己を生きることができた。その意味でまさしく特殊人であった。しかしその代助の優越性は、かれの生活が父の財産に支えられており、父との関係を断たれることによって、一挙に崩壊するものである点において、明治の現実の大地にしっかり根をおろしたものでなく、こしらえ物めいた脆弱さをまぬがれなかった。かれはすべてを批評するが、その批評は現実的基盤を欠くものであったから、批評すればする程、現実から孤立し、なにものも生み出すことができない。

代助は自分だけの世界に生きて、なにひとつ現実に働きかけることができない。かれは自分の生活、自分の命、

自分の感覚を味わうだけで、かれの美的生活が高まれば高まるほど、現実との関係がうしなわれ、自己閉鎖的にならざるを得ない。冒頭の、心臓に手をあて、鏡に見入り、自分の姿にほれぼれしている代助の姿は象徴的である。だから、いかに自分の生活を誇り、余裕のない、生存のために無理に無理を重ねる貧弱な日本の社会と知識人の生活を批評しようとも、それはただ観念的な、言葉だけのものとして空虚に響く。

漱石は代助を「あまり都会化し過ぎてゐた」と評している。「二十世紀の日本に棲息する彼は、三十になるか、ならないのに既に nil admirari の域に達して仕舞つた。彼の思想は、人間の暗黒面に出逢つて喫驚する程の山出しではなかつた。彼の神経は斯様に陳腐な秘密を嗅いで嬉しがる様に退屈を感じてはゐなかつた。否、これより幾倍か快よい刺激でさへ、感受するを甘んぜざる位、一面から云へば、困憊してゐた」(同)というのである。漱石は代助を「是程に進化——進化の裏面を見ると、何時でも退化であるのは、古今を通じて悲しむべき現象だが——してゐた」(同)と評している。

芥川龍之介は『点心』におさめられた「長井代助」という短い文章に、「我々と前後した年齢の人々には、漱石先生の『それから』に動かされたものが多いらしい」と書いている。そして長井代助にほれこんだ人々が多かったことをいい、それどころか、「自ら代助を気取つた人も、少くなかつた事と思ふ」と述べている。しかし漱石は、このような意味での「あまりに都会化し過ぎ」た、あまりに近代的な「特殊人」である代助を、必ずしも単純に全的に肯定していたわけではない。

冒頭の部分に見られるように、ただ自己をのみ指向し、自己をのみ生きる代助、「頭の中の世界と頭の外の世界を別々に建立して生きてゐる」、現実には全く無能な代助として、その退廃、空虚、観念性が戯画的にさえ描かれている。代助の議論は三千代から「けれども、少し胡麻化していらつしやる様よ」と指摘されざるを得ないようなものである。たしかに代助は「是程に進化」していたが、裏面から見れば、やはりそれは「退化」であることをま

ぬがれなかった。

『それから』の世界は、代助がこのような自己の世界をみずからうちこわし、自分自身を処世の苦しみ、貧困と苦痛のただ中につきおとして、社会そのものと真正面から向きあうところに成立する。前半部分の代助の世界は、やがて崩壊するもの、代助自身によって否定されるべきものとして描き出された。しかもこの代助が、芥川の述べたような受け取られ方をした所に日本の近代の問題があった。漱石はそれを外部から批評するのでなく、その矛盾の先端に立ち、それをつきぬけた新しい生存の可能性を探るところに、『それから』の世界をつくり出した。

3

代助と平岡は中学時代からの知りあいで、兄弟のように親しくしていたのであった。たがいにすべてを打ちあけあい、力になりあうようなことをいうのがたがいの「娯楽」であったと漱石は書いている。そしてそのために犠牲をはらうこともいとわなかったのである。平岡は人に泣いてもらうことを喜ぶ人であった。代助は人のために泣くことの好きな男であった。こうして代助は共通の友人の妹である三千代を、みずから周旋して平岡と結婚させた。それから三年たった今、平岡も変り、代助も変った。平岡はつとめて人の同情をしりぞけるようにふるまった。代助は次第次第に人のために泣くことが出来なくなった。

今の代助は冷淡な奴だという非難に対してほとんど無感覚であった。実際、自分はそう熱烈な人間じゃないと考えているのである。「三四年前の自分になつて、今の自分を批判してみれば、自分は堕落してゐるかも知れない。けれども今の自分から三四年前の自分を回顧して見ると、慥かに、自己の道念を誇張して、得意に使ひ回してゐた。鍍金を金に通用させ様とする切ない工面より、真鍮を真鍮で通して、真鍮相当の侮蔑を我慢する方が楽である。と今は考へてゐる」(六)と漱石は書いている。代助はかれ自身に特有な思索と観察によって、次第次第にメッ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com